

太宰管内志

大隅之下

大隅郡 始羅郡 肝屬郡
 取謨郡 熊毛郡

和書門		
二九六〇一	二〇二	八二
號	函	冊

庫文閣内		
三五八二	二九六〇一	七二
架	冊	號

内閣文庫		
番號	和 29601	
冊數	82 (28)	
函號	176	44



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



太宰管内志

大隅之下

○大隅郡

延喜式

大隅國大隅郡あり

和名抄よ此郡訓注をとせ
ハ國下よ注とるが故あり

名義ハ風土記

當國有三隅島岬故曰大隅とあり

風土記

ハ神学類聚抄
よ引出あり

元亨釈書

卷よ持統帝六年夏五月傳

佛教于大隅阿多西州大隅極西僻區民未聞真化詔太宰師

河内王遣沙門佛像經傳唱佛法續紀

卷よ和銅六年四月

乙未割日向國肝坏贈於大隅始羅四郡始置大隅國同書世

卷よ大住直倭上大住忌寸三行云云同卷よ神護景雲三年

明治十一年獻本

九月巳丑云云道鏡大怒解清曆本官云云有詔除名配於大

隅とあり此郡始ハ阿多益救多禰あとの如く一國あり

又此郡名は依て一國を定の給へるなり郡大様ハ和名抄九卷ハ大隅郡人野

大隅謂列始臘禰覆大河岐已上七郡あり寛知集ハ大隅郡云云三

十二村郷村帳ハ大隅郡櫻島郷横山小池赤生原武松浦二保藤野古里赤水野尻田濱

黒神瀬戸服牛根郷禁二境大根占郷神之河坂小根占郷川北川南

府伊佐敷高田代郷田代新城郷新城あり櫻島地古

よ角と初よ委輿地圖を按ずるハ大隅郡東西南の三方ハ

海に至リ北ハ肝屬郡よつけりある人云大隅郡今ハこづ

ハ十八村となれりと云又輿地圖を按ずる小大隅郡

大泊より屋久嶋ハ二十里種子島ハ十六里日向の五及田

ハ五十六里薩摩の山川の津ハ十三里あり

○串上郷

萬葉集仙覺抄ハ大隅國風土記云大隅郡串上郷者昔者造

國神勳使者遺此村令見消息使者報遺有髮梳云可謂髮梳

村因日久四良郷髮梳者集人俗語久四良今改曰串上郷と

あり郷村帳を按ずるハ串良郷今ハ肝屬郡といハり

○人野郷

和名抄ハ大隅郡人野とあり上田百樹云人野ハ入野の誤

よて伊利乃なるハきつと云ヒ此説さもあるへしハ

今ハヨコエサレト
ヨシヨシヨシヨシ

○大隅郡

和名抄云大隅郡大隅とあり大隅ハ是也於保須美と訓へ
し名義ハ郡家外とを置給へる處まで負せしむ。此郷今
ハ詳からば和爾雅名處部大隅國大隅浦あり此郷内なる
へきク武備志日本考大隅處ハ隅島と云えのありし
由あり事ハ是なり

○謂列郷

和名抄云大隅郡謂列とありいのよむへきヤ此郷事
すへて考へる

○始鵬郷

和名抄云大隅郡始鵬とあり始鵬ハ阿比羅と訓へし
始羅郡下さて郷村帳を考ふるハ肝付郡ハ始良郷有て大
隅郡とある事なく後世又郡界外と替つてつくふれりや

○禰覆郷

和名抄云大隅郡禰覆とありいよハ詳ならず強ていし
禰志覆の志を有するまでし有む。豊前国宇佐郡安覆
ふし由あり。螢蠅抄島津文書云弘安四年蒙古合戦勳功
賞筑前國早良郡比伊郷地頭職配分事一人大隅國禰覆弥
次郎清親田地五町上乙五凡名内屋敷三箇所東吉光名内
長洲庄内島地一町乙五凡名内長洲庄内右就孔子配分如

此有限佛神事本所年貢守先例不可有懈怠之状如件。正應元年十月三日。沙弥在判。志布志記云。天正元年隅州祢寝重長降參於義久公。牛根又落城二年。義久公知行牛根伊東氏押寄伊地知根占。郷村帳云。大隅郡大根占。郷小根占。郷あり。ふ。よく考ふへし。武備志日本考大隅薩摩件云。志武志内浦根占庄内とあり。

○大阿郷

和名抄云。大隅郡大阿とあり。いま詳ならず。強ていし。大阿枝の枝字を省けるも有む。郷村帳云。肝付郡大始良郷と云もあり。阿枝とく例ハ此国又大阿ハ於保久熊毛郡と云もあり。

萬と訓へき。此れとも大隈ふとよふ地名今聞えず。肝付郡又高隈郷と云ハあり。

○岐郷

和名抄云。大隅郡岐とあり。上田百樹云。大隅郡岐とあり。一本云。岐刀とありと云。さしと幾等と訓へき。すへて此郷事ハ詳々ならず。又按ず。須岐。佐須。脱し。多る。り。東鑑三十八卷云。岐五郎左衛門尉と云。省り。由あり。人云。や。郷村帳云。大隅郡佐多郷。伊佐敷と云地名あり。

○始羅郡

延喜式云。大隅國始羅郡あり。和名抄云。大隅國始羅阿比良

とあり。名義いよ、詳ならず。右事記中卷、阿多之小崎、居國、吾田邑、吾平、津媛云とあり。ハ、この始羅、よ、れ、る、名、
 日、や、さ、水、と、も、日、向、吾、田、と、あり、て、又、吾、平、と、あり、ハ、處、も、多、
 っ、ひ、て、く、く、く、く、と、似、多、り、さ、れ、ハ、ア、ヒ、ラ、と、い、ふ、ハ、別、又、
 よ、る、處、あ、り、て、人、名、も、負、せ、ら、る、。重、て、按、す、る、は、吾、平、と、
 云、地、名、ハ、畔、平、と、云、意、又、て、も、あ、り、む、。本、居、大、人、云、始、ハ、
 鳥、合、又、又、て、ア、フ、の、音、な、る、を、ア、ヒ、ラ、と、い、ふ、。し、り、
 さて續紀 卷曰、和銅六年四月乙未、割日向國肝坏、贈於始
 羅四郡、始置大隅國、同書十卷、天平元年秋七月辛亥、大隅
 隼人始羅郡、少領從七位下、勳七等、加志、君多利、外從七位上
 佐須岐君夜麻等、久々賣、並授外從五位下とあり。郡大塚ハ
 和名抄九卷、始羅郡野串伎、鹿屋、岐刀、郷己上、寛知集、始
 羅郡云云、三十二村、郷村帳、始羅郡加治木郷小田、日木、高

井田、世町、深水、千本、豊田、東、銚田、礼津、春花、長瀬、
 住吉、千松、中津野、益田、鎌倉、脇元、西、別府、西、銚田、
 本輿地圖を按する、始羅郡東ハ、贈於郡南ハ、海北ハ、桑原
 郡、西ハ、薩摩國鹿兒島郡、隣りて、東五六里、南北七八里、
 り、常足、按する、昔の始羅郡と云ハ、大隅肝付、二郡の内、
 いりて、中比、絶、多、り、趣、多、る、を、近、比、と、桑、原、郡、を、割、て、始
 良、郡、を、作、り、物、と、聞、ゆ、そ、ハ、昔、の、郷、名、
 不、と、を、勘、へ、合、せ、て、と、る、。

○加志

續紀十卷、大隅隼人始羅郡少領外從七位下、勳七等、加志、
 君多利云云とあり。加志ハ、可之と訓じ、ハ、名義いよ、詳
 ならず、さて加志ハ、今の加治木を云々。始羅郡加治
 筋、よ、て、世、人、の、知、處、る、。島津家の一門、加治木、住、を、と、云、

西遊記は、大隅加治木の北に龍門の瀧と云ふのあり。昔唐
人加治木の湊に入津せし比、甚此瀧を受て常は此處に
遊ひて、唐土龍門の滝を見る心地せりして、此滝を龍門の
滝と名付けると云。幅五六間、高さ十三間斗と見えぬが、
其地の人又とへし、高さ五十間、幅十間ありといふ。瀧壺甚
深し、此内又大なる亀年久しくす。甲のこり四五
尺斗あり。此地の人をりくこるこゝとありと云。

○ 佐須岐

續紀十卷は、大隅隼人始羅郡少領云云。佐須、君夜麻云云と
あり。佐須ハ、差珠と訓へし。名義詳ならず。地方もよゝ知ら

多し。去ひていし、大隅郡は伊佐敷と云地名あり。是ふと
よてしありむ。ななくむかふへし。

○ 吾平山、上陵

書紀は、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西州之宮。因葬日向
吾平山、上陵。古事記は、此神御陵の諸陵式は、日向吾平山、上

陵、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊在日向國無陵戸とあり。さて
前皇廟陵記は、今按今大隅國始羅郡之山とあり。此御陵今

ハ詳ならず。古事記傳十七卷は、薩國人の云く、吾平山、陵
リ。此巖洞東方は向へり。内の廣さ三十歩あり。陵上は祠あり。
り。又小川を隔て前は廟あり。鴉戸推現と云て、葺不合尊を
祭せり。と見えぬ。右此島も始羅郡内なり。今始羅郡
地と云物ハ肝属郡カハ、是も始羅郡事なり。今始羅郡
疑はし事と多し。この中は、ありて三陵考の説の如し。

洞裡九十間四方斗なり。前の小河と云ハ始良山の間に
流出て、鶴戸の前まで落合ふ事也。里人の語傳へは膏不合
尊ハ日向の鶴戸まで生れ給ひ。此鶴戸まで崩給ひ。由を
いへり。洞ハ東向として穴ノ口九六尺。内横十間斗。かく
ハ五間斗よりして。天井ハ一丈五尺あり。始良山の西又川上泉
ノ居宅の跡。又熊襲の城跡あり。その南則始良郷也。

○野裏郷

和名抄云。始羅郡野裏とあり。此郷車すへて詳ならず。元ノ
野里を誤る。ハあらぬ。今大隅郡始羅郷内又野里と
云處あり。是ハ今始羅郡の地也。

○串伎郷

和名抄云。始羅郡串伎とあり。串伎ハ久志幾と訓へ。名義
詳ならず。薩摩国ハ串木野と云處あり。伎ハ良ノ誤。串
良ノ誤。良なる。風土記又大隅郡串良あり。郡ハ国誤。

串良郷今ハ肝付郡の内といれり。又思ふハ串伎ハ
武備志日本考又申木野とあり。是也。

○鹿屋郷

和名抄云。始羅郡鹿屋とあり。鹿屋ハ加能也と訓へ。名義
詳ならず。さて景行天皇紀云。熊襲國の厚鹿文。連鹿文。
市乾鹿文。市鹿文。ふと云人名の見え多も皆此地名也。
此と聞ゆ。今肝付郡ハ鹿屋郷ありて。カノヤと唱ふるな
り。是由有て聞ゆ。是ハ今の始羅郡の地也。もうと云。彦山
四方原野也。島津家朝鮮より陶師をつき來。是て此所
おき給へり。是より此所ハ人家を作せり。今ハ四五軒と
いへり。其所の氏今又至りて。朝鮮風の名をつき。多
記三十三卷延文三年筑後国大原合戦件云。賀屋兵部大輔
とあるハ。此也。又よ。筑後国大原合戦件云。賀屋兵部大輔

○岐刀郷

和名抄云、始羅郡岐刀とあり。岐刀ハ、幾等と訓ヘヨウ。此郷の事すへて詳ならず。百樹云一本云、刀字カクハツヘリ。肝付郡の内よきさふ村

○肝屬郡

延喜式云、大隅國肝屬郡あり。和名抄云、大隅國肝屬、岐毛豆岐とあり。起麻子記とあり。名義詳ならず。さて續紀一卷云、文武天皇四年六月庚辰肝衝難波、後肥人等持兵割劫、覓國使部真木等於是勅筑紫惣領准犯決罰とあり。難波後肥ハ、考同書。卷云、和銅六年四月乙未、割日向國肝坏贈於

大隅始羅四郡始置大隅國郡大様ハ、和名抄九卷云、肝屬郡

桑原、鷹屋川上、雁麻郷已上、寛知集云、肝付郡云云三十八村

郷村帳云、肝付郡内浦郷南方、北方、高山郷前田、後田、新田、野崎、宮下、苗山、波見

始良郷上名、下名、禁、大始良郷濱田、野里、獅子目、木谷、大始良、横山、鹿屋郷、於原中之

高淵上、串良郷細山田、岩廣、有里、岡崎、上大原、高隈郷、高百引

郷百引、垂水郷、海、中、之、俣、市、勅、濱、牟、田、新、堂、、花岡郷ふとあり、

て日本輿地圖云、依て考ふる云、肝付郡東西ハ海を限とし、

南ハ大隅郡北ハ贈於郡と隣りて、東南より西北より

て十四五里、南西より北東より八里餘あり、贈於郡と

つげり大郡なり。島津師久公之舎弟氏久公、大隅國守護職、

よ移玉へりし事志布志記に見へ多し。又元久公大始良より御誕生有て其後志布志内城に御引移り有之候也とあり。天文四年三月国大乱の件に肝付河内守兼續、肝付之領主也とあり。志布志記に鹿屋氏と云ハ。肝付河内守兼右の三男宗兼初て鹿屋と号す。鹿屋院の并濟使よて鹿野屋を領する故あり。鹿屋周防外志兼入道玄兼、元久公の家老ありし。嘉吉元年三月十三日大覚寺門主僧正尊有日州諸縣郡御間之永徳寺よ自殺の時功ありて鹿屋等の子孫志布志に住す。

○桑原郷

和名抄に肝属郡桑原とあり。桑原ハ久波々良と訓むへし。名義ハ上卷桑原郡下よ云るゝ如し。此郷地今ハ詳ならず。

○鷹屋郷

和名抄に肝属郡鷹屋とあり。鷹屋ハ多加也と訓むへし。名

義ハよ詳ならず。竹屋ハ又ハ高屋のさして此郷地今ハさ

いふ。ふくは水とも高屋と云名ハ内浦郷の内ハ残さる由。

山陵考よ見え多し。神代山陵考ハ薩广國人白尾鷹屋郷ハ

村名帳よ肝属郡高山郷とあり。是よけありぬ。其郷は宮

下村と云もあり。されとも高屋山と云ハ肝属郡内郷北方

村よあり由あり。今の内浦郷則いよハ鷹屋郷よて

もありへし。辛凡々日記をこれハ始良山の北ハ高山町高

山岳國見山ふとあり。始良より三里北ハ高山町あり。

○川上郷

和名抄に肝属郡川上とあり。川上ハ加波加美と訓むへし。薩摩

国河邊郡は川上郷あり此は是もカハノへふとよむへき
つとも思へと安房国平群郡川上加波加義ともあり此はな
をハハカニ名義ハ川の有處はて負せるへしさて是行
天皇紀は熊襲有魁師者名石鹿文亦曰川上梟師云云とあ
る梟師は此川上は居ありし者なる一し幸丸云始良山の
居宅の跡と村名帳を按ずるは串良郷内は川東川西あり
云慶あり此ありりとや有む

○雁麻郷

和名抄は肝属郡雁麻とあり雁麻ハ加利万と訓へし印本
リマと假字を付あり然るは大隅薩广ハ桑麻は巨しき處
なる事石き物はなりの見ゆれも所麻の意はてカリアサ
と訓むへきくとも思へりき名義はまし考へにさて上田
と訓むへきくとも思へりき名義はまし考へにさて上田

百樹云肝属郡雁麻ハ舊事本紀今五卷は茅物部麻作連公
借馬連笑原連等祖は孫物部金連公野間連借馬連等祖
とあり借馬と同處なるへきくといへり此説はもありへ
し此郷地も今ハ詳なりす

○高屋山上陵

書紀は彦火火出見尊崩葬日向高屋山上陵右事記上卷日
者坐高千穗宮伍佰捌拾歳御陵者即有其高千穗山之西と
あり又今本天書記は彦火出見尊讓讓位於皇子之宮終崩
日迎高弥之嶺宇奈保之宮焉とあり水と讓位と云事上代
又ふきことはなれし例のうわくしし
諸陵式は日向高屋山上陵彦火々出見尊在日向國無陵戸
ふとありさて前皇廟陵記は薩摩國阿多郡大隅國肝属郡

俱有鷹屋郷蓋二郷境相接恐此地之山二郷地遙は隔多りて相接す處あり
す蓋字ハ若字を誤るやま山陵考ハ高屋山上陵在大隅國肝属

郡内浦郷北方高屋山之巔云云國柱謂高屋山之上俗謂國
見山國臨觀國高屋山之麓有高屋神社即祀出見尊之廟也

又高屋山之元謂天子山昔在景行天皇十三年帝親征熊襲
行闕于茲六年因以名焉とあり高屋山上陵ハ薩摩國阿多

郡内よても有むろと思ふる由あり故も今ハこも
も彼處もも拳て後の考へよつみなむ幸凡云平野村の北

云物あり此山より高屋山に登る道あり登りハそへて三
里あり初ハ石山を登る事二十丁斗より又茅深キ野山
を登るこ一里さてそ北よりま木の生る山を登る
こ一里よ一て峰又至る北面は京都馬場母養子拳あり

いつれも拳つさなり御陵ハいつれとささるるあり
い々れと五尺しり立る岩上又社を作れりあり是を御
陵ふへき此地方凡五間斗あり此うし南のうさ大
巖ニありて其下は長一丈横五尺斗又て厚二尺斗ふる岩
あり自然の岩と見えず内ハちくろこふり御陵は用
いさ石ふとふへしさて此拳より大隅薩摩の地よく
ここさる又屋久島種子島とも見の陵ともいふ里人ハ
此山を國見山とも國見嶽とも國見の陵ともいふふり此
山を東又下りてハこといふ
村あり下二里余あり

○暗字辣

圖書編五十卷又薩摩州起麻子記暗字辣羊買高とあり暗
字辣ハ字都羅と訓へし薩摩とあるハ誤りて大隅國肝属
郡内浦を云なり郷村帳ハ肝付郡内之浦郷あり羊買高と
細見記又内浦より大泊へ十八里輿地圖又凡筋圖を按す
日向國志布子へ五里とあり

る。大隅國內浦ハ高山の東南海中より出る所也。
て入海もある所也。

○ 取謨郡

延喜式。大隅國取謨郡あり。和名抄。大隅國取謨五年と
あり。上田百樹云。謨瀾。名義詳なり。さて類聚三代格今本
本漁又つくる。

天長元年九月三日官符。能満合於取謨云とあり。郡大

様ハ。和名抄凡巻。取謨郡謨賢。信百。寛知集。取謨郡云云

三村。或書。益救島廿四村あり。天長元年官符。多
取謨郡又つり。島四郡を合せて二郡

と。取謨。益救。熊毛。加へ給へる事見えり。其四郡と云ハ能
間。取謨。益救。熊毛。を云ふ。此四郡内。益救。一郡ハ別島
初。天武天皇の比。事見えり。一國。其後。天平五年。紀。多
て。益救。郡。と云。事見えり。此。比。より。多。概。存。と

ハ。定。と。つ。つ。む。の。く。て。こ。を。益。救。郡。大。領。多。祿。直。と。云。姓。を
給。ひ。つ。つ。め。さ。て。彼。四。郡。を。二。つ。つ。む。も。能。間。を。取
謨。又。合。せ。益。救。を。熊。毛。又。合。成。と。あ。れ。も。取。謨。ハ。熊。毛。も。多。概。
島。内。に。あ。る。事。勿。論。な。り。又。益。救。を。熊。毛。又。合。成。と。あ。れ。も。取。謨。ハ。熊。毛。も。多。概。
ハ。益。救。神。社。ハ。熊。毛。郡。に。あ。り。按。ず。る。に。取。謨。郡。内。に。多。概。も。
多。概。島。を。以。て。熊。毛。郡。と。し。益。救。島。を。以。て。取。謨。郡。と。せ。り。さ
水。天。長。官。符。方。誤。り。て。益。救。を。取。謨。又。合。成。熊。間。を。熊。毛。
又。合。成。と。あ。る。に。て。式。の。方。を。正。す。べ。し。
ふ。後。件。と。も。し。い。ふ。べ。し。

○ 益救神社

延喜式。取謨郡益救神社とあり。益救ハ。夜久と訓へし。御
名義ハ。島。名。よ。り。さ。て。薩。摩。人。國。柱。云。大。隅。國。取。謨。郡。益。救。

島。益。救。神。社。祭。火。火。出。見。尊。也。或。云。祭。夜。藝。命。未。詳。又。或。人。説

ハ。益。救。神。社。ハ。益。救。島。官。浦。一。品。浦。と。あり。て。今。ハ。一。品。室。壽

大推現と云。嶽推現と云なりと云。輿地圖を按ずる。益救島の中山に御嶽あり。宮浦と云。其北方の海邊あり。

○益救島

推古天皇紀云。二十四年三月。掖玖人三口。歸化。夏五月。夜。句人七口。來之。七月。亦掖玖人二十口。來。先後并三十人。皆安置於朴井。未及還。皆死。為同二十八年八月。掖玖人二口。流來於伊豆島。舒明天皇紀云。元年四月辛未朔。遣田部連於掖玖。同二年九月。田部連等。至。自掖玖。同三年二月辛卯朔。庚子。掖玖人歸化。天武天皇紀云。十一年七月丙辰。多祢人掖玖人。賜祿。

谷有差。續紀六卷云。靈龜元年正月甲申朔。云云。南島。奄美。夜。久度。感信。覺球美等。來朝。各貢方物。同十一卷云。天平五年六月丁酉。益救郡大領外。從六位下。加理伽等一百三十六人。賜多襪直。十年四月。件云。陽候史真身。同書十九卷云。天平勝宝六年正月癸丑。太宰府奏。入唐副使。從四位上。吉備朝臣真備。船以去年十二月七日。來着益救島。自是之後。自益久島發進。漂蕩者。着紀伊國牟漏崎。本朝文粹四卷云。天長元年九月三日。官符云。能滿合於取謨。益救合於熊毛云云。兩朝平壤錄四卷云。養久山居海中。方圓二百余里。竹中叢茂。多茶等。又出多羅。不有地。都守之。谷道。犯死罪。矜免者。於彼官賣。狗。當截木。猷。

枚非銀贖身先死不可離也。和名抄十九卷。錦貝辨色立成。
云錦貝夜久乃斑貝。今按本文未詳但俗說西海有夜久島彼
島所出也枕冊子公卿殿上人かしの
かしのを孟くしてしてハやく貝とハふしの男子にうく
てあよをたよへよ出てとるにあり今も此貝よて孟を作
る俗ハ夜光秋日本紀。私記曰掖玖者西海別島也。出美貝
今俗謂之夜句貝。但此島与大隅相近耳。ふとあり。名義詳ふ
らす。さて書紀通證。掖玖島周匝百二十六里。在薩摩國南
多襪島西。始隸多襪後属大隅百廿里云云。是ハ古の道琉球
程を云ふ
圖。屋久島廻二十里三十丁。自薩州山川津至此島路程三
十五里。是ハ今程
を云ふとあり。日本輿地圖を按する。益救島こ
よりハ九里許あり。東南ハ安居黒石尾間あり。西北ハ中間。

長田。一湊。宮浦あり。和漢三才圖會。出せる屋久島。圖を按
する。北ハ近く一小島あり。一樓と名つく。是より東南西
北ハ打つらかりて石床。宮浦。古世田。舟行。黒石。中間。伊毛布。
長田。吉田。と拳より。新撰姓氏錄。元京諸蕃。揚候。忌寸。出自
木鳩帝之後。遠率。揚候。阿子王也。唐書。邪古とあり。武備志
ハハ粟活とあり。

○養久山

全浙兵制日本風土記。云云。因拱子非造成者乃本國沿海
之傍而有生成石子儼如做成精緻名曰天威子出于養山沿
海之處白子出于大隅山海灣皆大隅州所属之地。又ハ兩朝

平壤録四卷。養久山居海中方圓二百余里とあり。養久ハ、也俱と訓べし。則益救島の山なり。さて和漢三才圖會八十卷。屋久島在薩摩之南方十八里。峻可^島匝富士山。子丑至薩摩山川舟行三十二里とあり。薩^島廣人云。益救島山ハ甚うる。とも他處よりわたりて其理密なり。松ふといハ殊さ。のこ^島とありと云。松ハ諸國ハ益救松とて賞美するものなり。日本^島の地圖を按する。又島の中央ハ御ふけあり。南ハ見山あり。何^島も高山と聞ゆ。西遊記ハ屋久島ハ八重嶽とて高サ十三里の高山あり。此山より良材を出す。世ハ薩摩松といふ云。さて南國の鶴春ハ至て北方ハ渡らむとする時。數千里の北海を越行く事ハ羽つ。北て海中ハ落し事を恐る。故^島もや。此屋久島の八重嶽をのくりて空高く飛上り。虚空ハ至りてそれより北ハ向ひ飛渡るといふ。

○能満

續紀十一卷。天平五年六月丁酉能満郡ヲ領外從八位上栗麻呂等凡百六十九人因居賜直姓。

○謨賢郷

和名抄。取謨郡謨賢とあり。此郷の事すへて詳々ならず。

文字の誤ふと云。

○信有郷

和名抄。取謨郡信有とあり。是もすへて詳ならず。上田百

を有又誤りなるむ。信ハ薩廣の内な水也。此考ハその遠く何有と云郷名の例ハ出羽国村山郡徳有と云

○熊毛郡

延喜式。大隅國熊毛郡あり。和名抄。大隅國熊毛。久未介
とあり。名義いよひ詳ならず。周防國にも熊毛とて續紀十一
卷。天平五年六月丁酉。多禰島熊毛郡。大領外。後七位下安
志等十一人賜多禰後國造。姓類聚三代。拾天長元年九月三
日。宣符。云云。益救合熊毛とあり。郡大様ハ。和名抄九卷。
熊毛郡。熊幸毛。阿枝。有郷三寛知集。熊毛郡云云。九村。或書子種
十七村。熊毛ふとあり。日本輿地圖を考ふる。種子島す。ふ
郡。屬。ふとあり。北は関上。赤尾木。安城。ふと云地名見。あり。益救島ハ。西
あり。種子島ハ。東あり。て。其間十里余あり。へ。赤尾木よ
り。大隅郡大泊。二十八里あり。種子島ハ
南北は長く。て二十里あり。へ。

○多禰島

天平五年六月丁酉。多禰島熊毛郡。大領外。後七位下安志等十一人賜多禰後國造。姓類聚三代。拾天長元年九月三日。宣符。云云。益救合熊毛とあり。郡大様ハ。和名抄九卷。熊毛郡。熊幸毛。阿枝。有郷三。寛知集。熊毛郡云云。九村。或書子種。十七村。熊毛ふとあり。日本輿地圖を考ふる。種子島す。ふ。郡。屬。ふとあり。北は関上。赤尾木。安城。ふと云地名見。あり。益救島ハ。西あり。種子島ハ。東あり。て。其間十里余あり。へ。赤尾木より。大隅郡大泊。二十八里あり。種子島ハ。南北は長く。て二十里あり。へ。

天武天皇紀。六年春正月。饗多禰島人等於飛鳥寺。西。視
下。八年十一月己亥。大乙下倭馬飼部造連為大使。小乙下
上。寸主。光欠為小使。遣多禰島仍賜爵一級。十年八月丙戌。
遣多禰島使人等貢多禰國圖。其國去京五千餘里。居筑紫
南海中。切髮草裳。粳稻常豊。一菹兩收。土毛支子。莞子。及種
々。海物等。多。九月庚戌。饗多禰島人等於飛鳥寺。西。河邊奏
種々樂。續紀六卷。和銅七年四月辛巳。給多禰島印一圖。
同書十一卷。天平六年十一月丁丑。入唐大使從四位上
多治比真人廣成等來著多禰島。同書十六卷。天平十七
年十月戊子。論定諸國出
奉正稅。每國有數。但多禰
對馬兩島者。並不入限。同書廿二卷。天平宝字四年五

月戊戌右大舍人大允正六位下大伴宿祢上足坐_{ラレテ}記_下灾事
十條傳行人間充遷多禰島掾續紀二十三卷。天平宝字
四年八月甲子。勅云云壹岐對馬多禰等司身居辺要稍苦
飢寒出拳乏稻曾不得利欲運私物路峻難通於商量良
須矜愍宜割_下太宰所管諸國地子各給守一石束掾七千五
百束目五千束史生二千五百束以資遠戍稍慰羈情同書
廿五卷。天平宝字八年八月辛巳多禰島飢賑給之同書
廿六卷。天平神護元年正月戊戌大宰大貳從四位上佐
伯宿祢毛人坐送黨充遷多禰島類聚國史百五十九卷。
大同二年十月丙子壹岐多禰兩島校出隱田一百四十町

須準諸國例賜島司公廩田并郡司職田以外悉班田百姓
口分云云者許之類聚三代格_本今五卷。天長元年九月戊
申太政官謹奏停多禰島隸大隅國事右參議太宰大貳從
四位下小野朝臣峯守等解你謹檢按得太政官去二月十
一日符傳作島南居海中人兵乏弱在於國家良非扞城又
島司一年給物准稻三萬六千餘束其島貢調鹿皮一百餘
領更無別物可謂有名無實多損少益右大臣宣奉敕宣勘
利害言上者南溟淼々無國無敵有損無益一如符旨須停
島隸大隅國計其課口不足一御量其土地有餘一郡能間
合於取謨益救合於熊毛四郡為二於事得便者聖帝登樞

事期濟世明王布政理貴適時臣等商量昔漢元帝納賈捐
之言罷珠崖郡前史以為美談後世稱其英烈雖建國量疆
非無分野而恤民救急猶棄州郡况溟海之外費損如此加
以往還吏漂亡者多運送之民蕩沒不少守無益之地損有
用物求之政典深迂物議伏望依件停隸以省邊弊伏聽天
裁謹以申聞謹奏聞海東諸國記云吉國已丑年遣使來朝
書稱薩廣州內種島大守吉國以宗貞國請接待筑後上妻
系圖云關白道隆其子隆宗正四位下少將修理大夫筑後
守為九州筑後國司下向家上
妻郡故以上妻為称号以
日足日扇為旗幕之紋其子家久其子隆則其子經家其
子家房其子房直其二男家真三郎左衛
門阿波守号上妻建仁年中

在鎌倉時奉嚴命為種島代官下島云云在島年久而後藤
原信基公為當島領主於是家真可歸國之處最及晚年且
島主以為家真多年懷島民咸心服之云暫可令家真治一
島依契約言直為家臣賜五十町其嫡子家盛式部
大夫二男家
時二家盛嫡子家兼二男家治源左衛門尉号寺田
子孫在別記三男家
成源左衛
門尉家兼嫡子家教阿波
守二男家包次郎左
衛門尉其子家保
家教子家俊式部
大夫其子家範左京
亮其嫡子家貞号十郎大夫
時光公當家永可恃輔佐之臣旨賜文書矣今亡矣惜哉家
長代紛
失云
云二男家通式部左
衛門其子家重源
吾家貞嫡子家信九郎左
衛門
貞治五年四月十六日奉從賴時公於肥後州戰死歲三十

五法名其嫡子家幸河波守二男次郎左衛門尉家幸嫡子宗

尚九郎左衛門應永十六年己巳八月二男宗堅弥九郎宗尚

嫡子宗義式部少輔正長元年戊申三月十一日二男宗政

石見其子宗吉宗政嫡子家負河波守室德三年辛未十二月十日死去法名淨仁

二男家氏九郎次郎其子家年家負嫡子家房河波守文正應仁年

間種子屋久惠良部皈依法華宗家房亦改同宗明應三年

甲寅正月七日死去法名蓮妙二男家治下野守五月十四日死去法名法源家房

嫡子家雅七兵卫阿波守永正八年奉屬忠時公馳參大守忠治公

之御手往々有戰功大永二年壬午五月十四日死去法名淨蓮云云

家雅子右直式部大輔河波守明應元年壬子誕生天文八年閏六月

於市来平城奉從惠時公有軍功天文十一年壬寅十二月三

日死去法名蓮泉其子家續九郎左衛門河波守大永五年誕生

世々為增田村領主天文十二年春出雲守阿波守依逆心

密語祢寢重長重長同意率二百余負之兵三月廿二日渡

于國上浦田翌廿三日来赤尾木而急攻丹城直時惠時公長男後

從之家續為其一防戰及數刻重長之兵戰死居多時有和

睦之儀而重長四月歸卿家續学下野足利九華相傳一流

師肥後國周防又盛家傳授之天文年中賜數通免狀時克

公与重長相惡天文年中公自慶府皈島之時繫舩大泊浦

稱寢遣西村周防時玄与家續放火浦在家依之所司某提
鎗来向家續云云亦以鎗合互嚙勇猛牙爭勝利遂家續克
之播武功名其外敢無拒者解纜順風任意皈島公喜悅不
斜賞二者功天正十八年庚寅十一月十二日死去法名法
淨葬增田村鳥峯家續有男女三子嫡子家長孫九郎左衛
門阿波守七
兵工入道号入木女子二人者日高
大膳宗房妻次遠藤西之助家貞妻永禄元年戊午誕生母
長野平左衛門實昭女天正五年依時堯公命為家老職時
二是嚴父家續多年勤勞以故辭職數度頻訟之於是雖若
羊家長有可繼職命以不能固辞再三也然無許容不得已
家長聽公事天正年中大守義久公征肥筑豐三州久時君

屬其軍家長奉隨從同八年肥州馬場桶水保矢崎十四年
筑前岩屋往有軍忠就中豐州南郡御飯陣於白仁奉為
島津歲久公殿而家長勵戰功十五年正月十七日也文禄
元年太閤殿下秀吉公朝鮮國征伐日本諸將迄孟夏渡海
之法令也久時君屬大守義弘公之麾下有渡海命且肥前
名古屋有陣屋營作之事依是正月下旬家長奉君命纔步
兵六七十人領之二月中旬到名古屋時秀吉公近日可有
著御諸陣屋急可成就者日夜觸来如挽櫛齒然家長無人
而不及手又無他力無奈何既及緩急之咎之處筑後州上
妻鎮勝聞此事一姓同氏也不可不救之步卒二百餘人賜

加勢以故陣屋棟數七十軒二夜三日中造畢適危急鎮勝
厚甚深而四月上旬家長既島於是風聞君信佞者浮言海
海猶預矣諸士過半同佞者不義云云家長大驚嘗曾聞今
度背命不渡朝鮮將士或誅伐或改易或得所帶沒收等罪
者許多也諸士愚而陷君於不義吁不忠甚哉家長密談老
功西村時安同意家長相共諫君不義忠言雖逆耳君漸紂
得乍悔先非急決渡海然艤滕艘配士卒彼是延引逾月時
安家長思惟有遲滯咎受君命率軍衆九月十五日解纜先
渡朝鮮十二月十五日至金海久時罹病及遲々之間先遣
軍衆言上義弘公雖有遲譴依二者言被宥之加軍列勤軍

事翌年五月久時君渡楫朝鮮軍忠拔群相協太守公尊意云
云文祿四年秋奉從久時公移知覽院慶長元年家長於知覽
羅火災文書系圖紛失同四年久時公種子島本領安堵家長
再飯旧里安居數年艱難不可計自去冬庄內亂逆奉屬久時
公家長勞軍務慶長十四年家長剃髮号入木雖法聽公事
同至末年辭家老職云云家長有男女四人嫡子家直即九天
正九年辛巳誕生母西村壹岐女時与女慶長元年衆兵渡朝
鮮家直列其中時歲十六太守家久公御家老伊集院忠棟入
道幸侃野心露顯於城州伏見被誅依之息源次郎久真篁居
都城其外構十二砦叛太守公是時久時君率兵攻擊彼黨時

慶長四年己亥十二月八日家真戰死庄內安永法号宗清歲
十九家直女子西村權兵工時秀妻也家長女子二人肥後善
右工門盛隆妻次西村五次右工門時善妻也家長二男秀隆
初名家貞童名金千代下總三次惣左工門秀隆有男女四人
嫡子時真其次女子其次隆直其次女子也云云島隱集中卷

下演典藏試毫韻

此演御崗種島法花宗
旺化皆破禪律

邪宗歟士又揚塵何處藏蹤護法神鄉寺留君君不住羊

々春在客中新

南浦文集上卷下鐵炮記

代種子島
久時公

隅州之南有一島去州一十八

里名曰種子我祖世々居焉古來相傳島名種子者此島雖少其

居民庶而且富譬如播種之下一種子而生々無窮是故名焉
先是天文癸卯秋八月二十五丁酉我西村小浦有一大船不
知自何國來船容百餘人其形不類其語不通見者以為奇怪
矣其中有大明儒生一人名五峯者今其不詳其姓字時西村
主事有織部丞者頗解文字偶五峯以杖書於沙上云船中之
容不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種
之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是故其飲也
杯飲而不杯其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文
字之通其理也所謂賈胡到一處輒止此其種也以其所有易
其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里

有一津之名赤尾木我所由賴之宗子世之所居之地也津口有數千戶戶富家昌而南商北賈往還如織今雖繫船於此不若安津之深而且不漣之愈也告之於我祖父惠時与先父時亮時亮即使扁艇數十架之至於二十七日己亥入舩於赤尾木津丁卯之時津有忠首座者日刈龍源之徒也欲聞法化一乘之妙寓止津口終改禪為法華之徒号曰住乘院殆通經書揮筆敏捷偶五峯以文字通言語五峯亦以為知己之在異邦也所謂同声相應同氣相求者也賈胡之長有二人一曰牟良叔舍一曰喜利志多佗孟太子携一物長二三尺其為體也中通外直而以重為質其中雖常通其底要密塞其傍有一穴通

火之路也形象無物之可比倫也其為用也入妙樂於其中漆以小團鉛先置一小白於岸畔親手一物修其身眈其目而自其一穴放火則莫不立中矣其癸也如掣電之光其鳴也如驚雷之震聞者莫不掩其耳矣置一小白者如射者之接鵠於候中之比也此物一癸而銀山可摧鐵壁可穿甚穴之為仇於人之國者觸之則立卷其旣况於麋鹿之禍於苗稼者乎其用於世者不可勝數矣時亮見之以為希世之珍矣始不知其何名亦不詳其為何用既而人名為鐵炮者不知明人之所名乎抑不知我一島者之所名乎一日時亮重譯謂二人蠻種曰我非曰能之願學焉蠻種亦重譯答曰君若欲學之我亦罄其蘊奧

以告焉。時堯曰：蘊奧可得聞乎？蠻種曰：在正心。予眇目而已。時堯曰：正心者，先聖之所以教人，而我之所以學之也。大凡天下之理，莫不從事於斯。動靜云為，自不能無差矣。公之所謂正心，豈復有異乎？眇目者，其明不足以燭遠，如之何而眇其目乎？蠻種答曰：夫物要守約，守約以博見，為未至矣。眇目者，非見之不明，欲守其約，以致之遠也。君其察之。時堯喜曰：老子之所謂見，小曰明，其斯之謂欤。是歲重九之節，日在辛亥，涓取良辰，試入妙藥，于小團鉛於其中，置一小白於百步之外。於之火，則其殆庶幾乎。時人始而驚，中而恐，而畏之。終而翕然，亦曰：願字。時堯不言其價之高而難及，而求蠻種之二鐵炮，以為家珍矣。其妙

藥之節和合之法，令小臣篠川小四郎學之。時堯朝磨夕淬，勤而不已。嚮之殆庶者，於是百發百中，無一失者矣。於此之時，紀州根來寺有杉坊某公者，不遠千里，欲求我鐵炮。時堯感人之求之深也，其心解之曰：昔者徐君好季札劍，徐君雖口弗敢言，季札心已知之。終解寶劍，吾島雖偏小，何敢愛一物。且復我不求自得喜而不寐，十襲秘之。而况求而不得，豈復快於心欤。我之所好，亦人之所好也。我豈敢獨私於己，而韞匱而藏諸。即遣津田監物丞持以贈其一於杉坊矣。且使之知妙藥之法，与放火之道也。時堯把玩之餘，使鐵匠數人熟視其形象，用鍛季鍊新欲製之。其形制頗雖似之，不知其底之所以塞之。其翌年蠻

種賈胡復來於我島熊野一浦。浦名熊野者亦小廬山小天竺之比也。賈胡之中幸有一人鐵匠。時克以為天之所授。即使金兵衛尉清定者學其底之所鑿。漸經時月知其卷而戲之。於是歲餘而新製數十之鐵炮。然後製造其臺之形制。其飾之如鍵鑰者。時克之意不在其臺。其飾在乎可用之於行軍之時也。於是乎家臣之在遐迹者視而效之。百發百中者亦不知其幾多矣。其後和泉畧有橋屋又三郎者。商容之徒也。寓止我島者一二年而學鐵炮者殆熟矣。歸旋之後人皆不名而呼曰鐵炮又矣。然後畿內之近郊皆傳而習之。非翅畿內開西之得而學之而已。關東亦然。我輩聞之於故老曰。天文壬寅癸卯之交。

新負之三大船將南遊大明國。於是畿內以西富家子弟進為容者殆千人。撒師篙師之操舟如神者數百人。艤船於我小島。既而待天之時。解纜齊棹望洋向若。不幸而狂風掀海怒濤捲雪。坤軸亦欲扞吁。時耶命耶。一頁船擱傾。檣摧化鳥有去。二頁船漸而達於大明國寧波府。三頁船不得東而回我小島。翌年再解其纜而遂南遊之志。飽載海貨蠻珍。將歸我朝大洋之中。黑風忽起。不知西東。船遂飄蕩達於東海道伊豆州。州人掠取其貨。商容亦失其所。船中有我僕臣松下五郎者。手携鐵炮。既焚而莫不中其鵠矣。州人見而奇之。窺伺倣慕。有多學之者矣。自茲以降關東八州暨率土之濱莫不傳而習之。今夫此

物行乎我朝也。盖六十有餘年矣。鶴髮之翁猶有明記之者矣。是知嚮之蠻種。二鐵炮。我時克求之。學之一發而聳動於扶桑六十列。且復使鐵匠知製之道。而徧於五畿七道。然則鐵炮之推輿於我種子島也。明矣。昔者採一種子之生々無窮之義。名我島者。今以為符其識矣。古曰先德有善不能昭々於世者。後世之過也。因而書之。又小和漢三才圖會八十卷。大隅國多瀨島。俗作種子島。或多尼。或為多祿。云云。天長已前不攝國。郡有能滿益救。二郡。如二郡。自天長元年。額大隅國。而能滿合於馭謨益救。合於能七多瀨島。人皆其寺。法華宗。日隆上人為祖。撰列尼崎本興寺也。未院二字を寺字の未下と落せる。凡東西十八里。南北四里。余北至大隅。

内之浦十八里。亥子薩摩。山川三十五里。ふと見え多り。

○熊毛郷

和名抄九卷。熊毛郡熊毛とあり。熊毛ハ久万郡と訓へし。

郡名熊毛也。是を本よて負せしるへし。地理いよし詳ふし。

是ハハ熊毛神社ある處を云ふなり。熊毛神社の事ハ後よいへり。

○幸毛郷

和名抄。熊毛郡幸毛とあり。いかによむへき。此郷事す。

へて詳ふし。

○阿我郷

和名抄。熊毛郡阿我郷有とあり。阿我ハ安比羅とよむへ。

きり。此郷事も詳ならず。

○西村

南浦文集云。天文癸卯秋八月二十五丁酉。我西村小浦有一
大船不知自何國來。船容百余。人其形不類。其語不通。見者以
為奇怪。矣云云。とあり。西村ハ。尔志乃牟良と訓へし。多祢島
西よめる地。ふれしなり。多祢島の事。和漢三才圖會の地圖
を考ふる。西方は西村あり。そ
より北。東南西とうちわくりて。西村島間。下田。住吉。より。の
赤小本。國上。安佃。けんじ。弁形。坂井。平山。とつたね。拳あり。
國上と云ハ。東よ
めしなり。

○赤尾木津

南浦文集云。云云。織部丞。又書云。此去十又三里。有一津。津名

赤尾木。我所由頼之宗子世々所居之地也。津口有數千戸。戶
富冢昌而南。商北賈往還如織とあり。赤尾木ハ。阿可乎伎と
訓へし。名義詳ならず。地圖を按する。又赤尾木ハ。多祢島東
北隅よめる湊なり。此湊より大隅郡大泊又十八里あり。

○島分寺

類聚三代格。齊衡二年十一月九日。大政官符云。應置對馬島
講師事。右得大宰府解休。民部省。於十月十六日。符停止大隅
薩摩對馬壹岐多祢等國島講師。自尔以降。百余歳。徒有島分
寺。曾無修善根。空聞六時之鐘声。希見一乘之說法。方今大隅
薩摩壹岐等國島。依舊各置講師。始勤薰修。望請此國島亦講

師令修御願其供養以國宦料不仕人粮内因準品宦每月充
粗二斛五斗但法服布施料準壹岐島以陸地物彼施充皆府
解狀謹請宦裁者右大臣奉勅依請但依承和十一年四月十
日格以彼府管内僧選補とあり島分寺今ハ詳ならず此島
今ハすへて法華宗なる由あり島分寺も其宗旨にて傳
ハルもやえし島分寺今ハ傳ハル事ありし心尼寺も
ハルもやそのありありハ海上遠く隔多る處ハ
ハルもやそのありありハ海上遠く隔多る處ハ

○聖興寺

豐鐘善鳴錄三卷云無著禪師諱妙融族氏日野隅州人也云
云還鄉坐夏靈山聖興寺凡旬焚手香端坐至夏末喫粥次見

香煙印鉢水發機作偈曰

靈山付囑絕言詮迦葉破顏傳不傳端的全提有何物有

々心月本孤圓

尋適薩之副田住菴時值無外照公來寓隣里師往呈所見外
曰爾今做工夫如鑽火見煙欲親達大道須捨命一回始得師
聞覺如毒箭中心退位誓曰若無徹證分不再參見其夜坐至
四更豁然悟夜未曉急趨告外從外開皇德日商崔宗旨外命
繼席付衣叮囑

○熊七神社

和漢三才圖會云大隅國熊七神社在熊七郡宮村書紀通證

大隅國熊毛神社俗傳夜火火出見尊神代三陵考也。種島
浦田社祭嘗不合尊あり。式は周防國熊毛郡熊毛神社なり。同神なり。熊毛郷は祭する神なり。へい。い。ま。考へん。

大宰管内志 大隅之下

太宰管内志

大隅國元 薩摩日向備考

○吉多牧

三代實錄四卷。大隅國吉多野神二牧云云とあり。吉多ハ
詳からず。しひていも。予志陀と訓む。へ。き。つ。さ。る。地名ハ
世々多きえのなり。薩摩國鹿兒島郡吉田郷大隅國夜久島
吉田村分ともあり。是等ハ。あ。く。つ。な。か。よ。く。考。ふ。へ
。彦山人云鹿兒島城下近く吉田と云處ありて牧あり。大
隅との國さっひりりと云里。

○野神牧

三代實錄。野神牧云云とあり。野神ハ。熊加神と訓む。へい。
地理詳ならず。大隅郡櫻島郷野尻。曾於野口。ふとあり。ん。

此邊野上と云處ハめらぬや。

○茂森

和尔雅名處部大隅國茂森とあり。茂森ハ志家理能乞利と訓むへいよと考へた。

○安山寺

島隱集中卷文明隅州安山主盟雲夢禪師將有東京之行。待舩便於日州南浦口。予偶在此向云云。賦唐律一章。見示以可擬修鳳之文。不堪感謝。次韻命筆。

禪文共熟老詩人。象角何如一角麟。荒艸未除初築地。來

傾華蓋物皆新。

大隅志跋

國尔郡有郡尔鄉有鄉尔里有者古代与理能定米奈理然有抒母今乃世尔至互郡名者傳波礼抒母倭名鈔尔出有鄉名乃全傳波礼留波聞衣受爰尔大隅國等云者古尔日向國内四郡乎割互置給倍利志國奈留乎打日刺都与理波雲居成遠久放理互筑紫之南尔片与理海片附多流國奈礼婆其國之知在人希那理然礼婆古久記世之書等乃地名

母今波於哀呂氣尔能美成奴如斯互我友伊藤常
足翁者書乃道尔心乎志米互古乎德比今乎約也
加尔志互著波志給在典母數多久有我中尔九國
二島之事者古典乃限引出波多近世乃物尔繁久
見衣多留乎毛摘取又自思依礼志筋乎母記志鹿
玉之年月未祢久勤賜比互其典成奴其乎太宰管
舟志等云往昔寧樂宮御宇
高瑞淨足姬天皇乃大御代國々尔於保勢天撰世

給比志風土記若世尔傳波理此典尔合互考閑互
婆詳尔往昔之事母知良礼末志乎等贈於郡乃曾
乎依閑歎木杜乃奈氣加不折柄翁能母止与理契
置都留大隅之事波伊加尔序也等有祁礼婆辞美
難久互又一渡讀渡志互此卷乃片端尔拙詞乎書
添侍留南

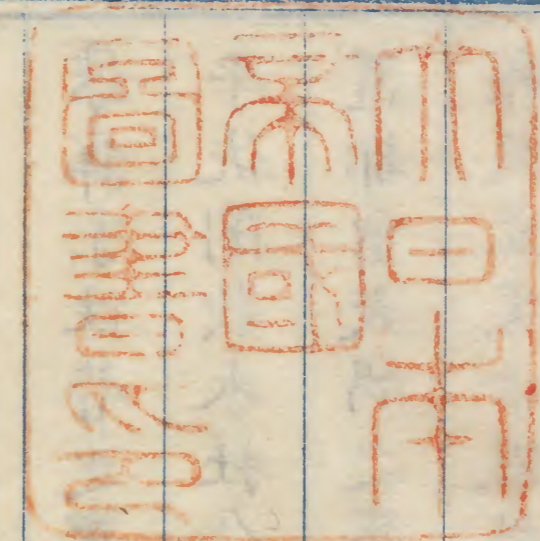
天保十二年八月

德安惠風謹書

天保十一年八月

新刊

...



...

